寛政十一年瓦屋兵助作銘鯱瓦調査報告

1997. 5

大和郡山市教育委員会

寛政十一年瓦屋兵助作銘鯱瓦調査報告

大和郡山市教育委員会

鯱瓦　正面

鯱瓦　右側面

鯱瓦　背面

鯱瓦　左側面

例　　言

1．本書は、大和郡山市城南町、今井昌平氏自宅庭で発見された鯱瓦の調査報告書である。

2．調査期間は下記の通りである。
　平成８年５月～同年11月。

3．調査は、以下の組織で実施した。
　調査員：山川均（大和郡山市教育委員会社会教育課　主任）。
　実　測：宇田員将、伊藤雅和、南憲和（以上奈良大学）、土居規美（奈良女子大学）、武田浩子。
　協　力：堀川正治、杉岡雪子。

4．本書は、以下の分担で作成した。
　原図トレース：武田。
　執筆・編集：山川。
　写真撮影：西川達、山川。

5．調査に際しては所有者の今井氏を始め、下記の方々に絶大なご協力や貴重なご指導をいただきました。記して感謝いたします。
　向井止津男氏（〔財〕柳沢文庫保存会 館長）。
　米田弘義氏（〔財〕柳沢文庫保存会 学芸員）。
　大和郡山市秀長百万石まつり実行委員会の皆さん。

本 文 目 次

1　鯱瓦発見の経緯と経過 …… 1
2　鯱瓦の概要 …… 5
3　まとめ …… 8

挿 図 目 次

図1　鯱瓦発見時の状況 …… 1
図2　採集時の状況 …… 2
図3　復元作業 …… 2
図4　実測 …… 2
図5　約130年ぶりに対面した鯱「夫婦」と新聞記事 …… 3
図6　頭部俯瞰状況 …… 4
図7　側頭部俯瞰状況 …… 4
図8　銘文 …… 4
図9　頭部内面の指頭圧痕 …… 5
図10　尾部挿入の状況（内面） …… 5
図11　銘文拓影（1／2） …… 6
図12　矢田口の位置図（1／25,000） …… 7
図13　鯱瓦全体実測図（1／4） …… 9～10

寛政十一年瓦屋兵助作銘鯱瓦調査報告

1　鯱瓦発見の経緯と経過

平成８年３月23日から同年６月30日までの100日間、大和郡山市では大掛かりなイベント「秀長百万石まつり」が開催され（会場：郡山城跡）、入館者は県内外から約15万人に及んだ。本イベントで特筆されるのは、大和郡山市では初めて「豊臣秀長」およびその前後の時期の資料、さらに近世期の郡山城主ならびに郡山藩関係の資料が一堂に会した、という点である[1)]。

ところで、郡山藩は明治の廃藩置県まで存続し、大和郡山市では現在も町割りや住宅にその面影を色濃く残す。そのためか当市では一般市民レベルで重要な文化財を所有している方が多い。もとよりイベントにおける展示物もこの種の個人蔵品を数多く展示したのだが、実際に市民や旧郡山藩士の方々が所蔵している資料は想像以上に膨大で、展示物を観覧した市民などから、実に様々な埋もれた歴史資料の存在がイベントの実行委員会に伝えられることとなった。その中には驚くべき「眠れる」資料が見られたが、今回報告する鯱瓦もそのうちの代表的な１点である[2)]。

鯱瓦発見の経緯　平成８年４月上旬に「秀長百万石まつり」を観覧に訪れた今井昌平氏（市内

図１　鯱瓦発見時の状況（左：頭部～胴部　右：尾部）

図2　採集時の状況

図3　復元作業

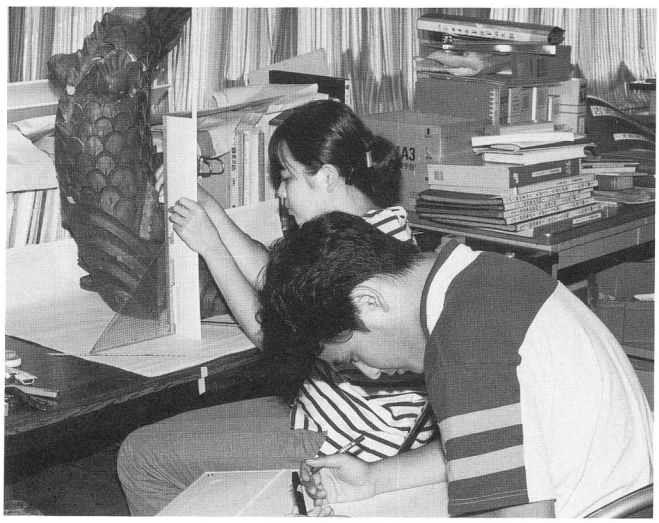

図4　実測

城南町）が、自宅庭に鯱瓦が存在する旨を実行委員会に伝えた。その約１カ月後の５月19日、筆者（山川）は鯱瓦を実見するため今井氏宅を訪問し、それが比較的良好な状態で遺存していることを確認（図１）すると共に、鯱の腹部に紀年等の銘文が存在することを確認した。報告を受けた大和郡山市教育委員会ではこの鯱瓦の郷土歴史資料としての重要性に鑑み、鯱瓦を借用のうえ破損部分の修復等を行い、また写真撮影や実測等の記録措置を講ずることとした。

対となる鯱瓦の確認　鯱の借り出しは５月30日に行われた。この際、行方がわからなかった尾の部分なども発見された（図２）。その後、筆者は教育委員会に持ち帰った鯱瓦の銘文が南村俊一著『石造物郡山城趾転用材調査概要』[3]に所載の鯱瓦銘文と全く同じことに気づき、その鯱瓦の現在の所有者である㈶柳沢文庫保存会（以下「柳沢文庫」と略）に連絡、破片を照合して両者の銘文、瓦笵が共通することを確認した。この結果、今井氏所有の鯱瓦と柳沢文庫所蔵の鯱瓦とは一対のものとなる可能性がきわめて強くなった。鯱は本来夫婦一対で櫓等の城郭建造物を守護するものといわれている。この「夫婦」鯱は明治６年（1873）の廃藩置県によって郡山城の櫓が競売にかけられた際、別々の買い主によって買い取られ、別離の運命をたどったものと想定される。なお、両鯱瓦は形状・寸法がほとんど同じで、雌雄は決し難い。

復元・展示・図化等　鯱瓦の復元作業（図３）は６月４日に完成、今井氏の承諾のもと、秀長百万石まつりの会場で相方の柳沢文庫所蔵の鯱瓦と共に展示されることとなった。また、それに先立って記者発表も行われ、「約130年ぶりの夫婦対面」として話題を呼んだ（図５）。

６月30日に秀長百万石まつりは終了し、翌日鯱瓦は再び教育委員会に持ち込まれた。そこで若干の修復を行った後、実測・写真撮影等の措置を行った。実測は測者・記入者の２人で行い（図４）、実質約１カ月（トレース・拓本込み）を要して完成した。写真撮影は部分撮影等は筆

郡山城の鯱
旧家から発見

約130年ぶりに対面した2つの鯱。手前が今回見つかった鯱

明治時代初めに競売にかけられた郡山城（大和郡山市）の櫓（やぐら）の鯱（しゃちほこ）

130年ぶりに2つ〝対面〟

秀長百万石まつり　きょうから展示

産経新聞　1996.6.6

図５　約130年ぶりに対面した鯱「夫婦」（左が柳沢文庫のもの）と新聞記事

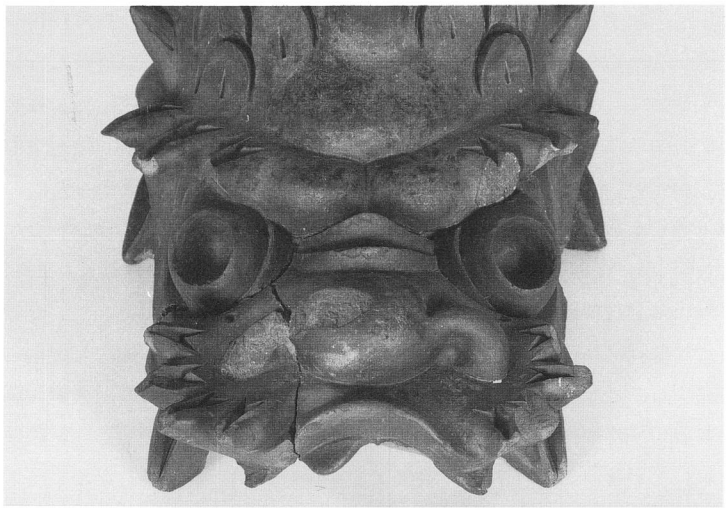

図６　頭部俯瞰状況

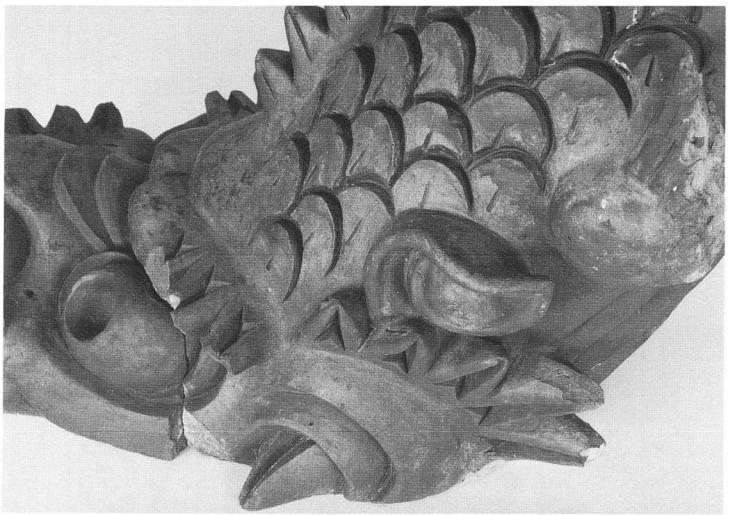

図７　側頭部俯瞰状況

図８　銘文

者が行い、全体撮影については専門業者に委託した。

2　鯱瓦の概要

寸法　鯱瓦の実測長については以下の通りである。

全　　高：73.6㎝（尾鰭欠損）

基底部幅：30.2㎝

基底部長：36.6㎝

焼成　焼成は堅緻で、燻しの状態も良好である。全体の色調は黒銀色（燻しのかからない部分は明灰白色）を呈し、茶味・黄味がからないもので、良質の大和近世瓦の一般的特徴と共通する。

頭部　頭部は巨大な目玉、幅広の鼻翼、ならびに眉、髭等が擬人的に表現され、その容貌は

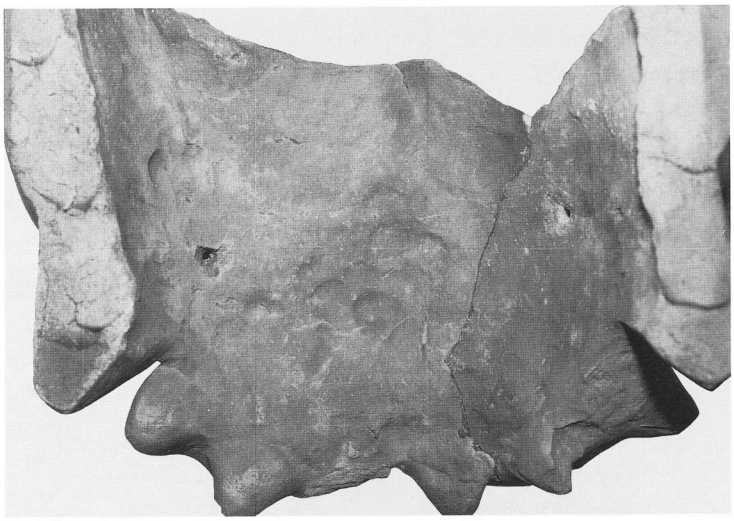

図9　頭部内面の指頭圧痕

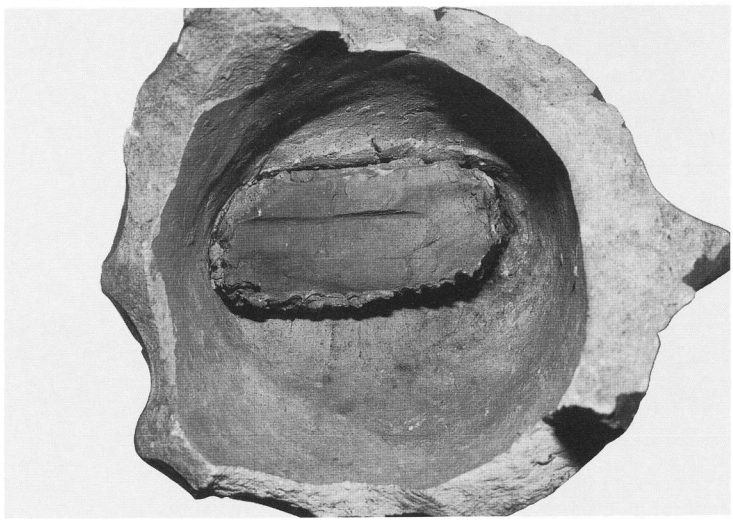

図10　尾部挿入の状況（内面）

はなはだ魁偉である（図６）。なお、鼻孔上部に穿孔が見られる。口は口唇を軽く上にめくり上げた状態で、上顎からは巨大な牙がのぞく。また口裂の後部にも大きな牙がある。耳は渦巻き状に表現され（図７）、耳穴は棒状工具の先端で丁寧に穿孔されている。こうした頭部の成型にはまず瓦笵を用い、後に細部を削り出したものと想定する（内面の指頭圧痕が著しい＝図９。ただし確実に瓦笵を用いた痕跡は有しない）。したがって頭部の細部形態・寸法は柳沢文庫のものとほぼ同一である。

胸部～腹部（鱗）　胸部から腹部にかけては、いったん直線的に立ち上がった後、後背部で大きく背後に反り返るもので、力感が強く表現されている。背鰭、前鰭、後鰭、腹鰭は別体で概形を成型の後、本体に接合されている。なおこの際、ほぞによる挿入はなされていないようである。また、鰭の成型は基本的に手づくね成型とみられる。

鱗はU字状の金属製工具（型）の刺突（上→下）によって外周線を画した後、中心下部に縦の刻線を入れて表現されている。なおこの際、鱗の上部に若干粘土を継ぎ足し、上部がややめくれ上がったような状態を表している。これは本鯱瓦に見られるひじょうに細かい細工の一例だが、このことによって鱗は生々しい立体感を持つものとなり、結果として鯱全体に強い躍動感を与えている。また、鱗の割り付けの都合により、基準より大きめ（もしくは小さめ）の鱗が必要な場合は型ではなくフリーハンドで鱗の外周線を刻んでいる。

腹部（頭部の背後にあたる）は蛇腹状に５段に表現され（図８）、それぞれの段に放射状の刻線を有する（再下段のみ３本、他は５本）。なお、蛇腹の下から３段目と４段目には銘文が刻まれている。

尾部　尾部は扇の模骨状に表現され、模骨間は横方向の刻線が施される。ただし本例では先端部分を欠損しているため形状の詳細は明らかにし難い。なお、尾部は別に概形を作った後、刻線を施したほぞによって本体に接合されている（図10）。

図11　銘文拓影（S＝1/2）

銘文　銘文（図８・11）は、腹部蛇腹の下から４段目に

　　寛政十一己未年八月吉日

とその製作年月日を刻み、同じく３段目に

　　郡山矢田口　瓦屋兵助工

と製作工人の名とその居住地を刻んでいる。

この銘文によって、本鯱瓦が江戸時代中期末の寛政11年（1799）に製作されたものであること、また製作者は矢田口に住む（そこに工房を構える）「兵助」という人物であったことが知られる。「矢田口」は現在の大和郡山市にも同じ地名（小字）を残しており（郡山城下町の西端付近、矢田街道から郡山城惣構への入口周辺が文字通り「矢田口」と呼ばれたものらしい[図12]。ちなみに郡山城にはこの矢田口を含めて、主要街道沿いに合計７つの主要な入口があった［郡山城七口］）、おそらくは近世においてもそのあたりに「兵助」の工房は存在したものと思われる。ところで、この矢田口の北に隣接する「大職冠」にはこの鯱瓦の製作年代と近い天明６年（1786）から寛政元年（1789）までの間、赤膚焼（再興赤膚）初期の窯が存在したこと

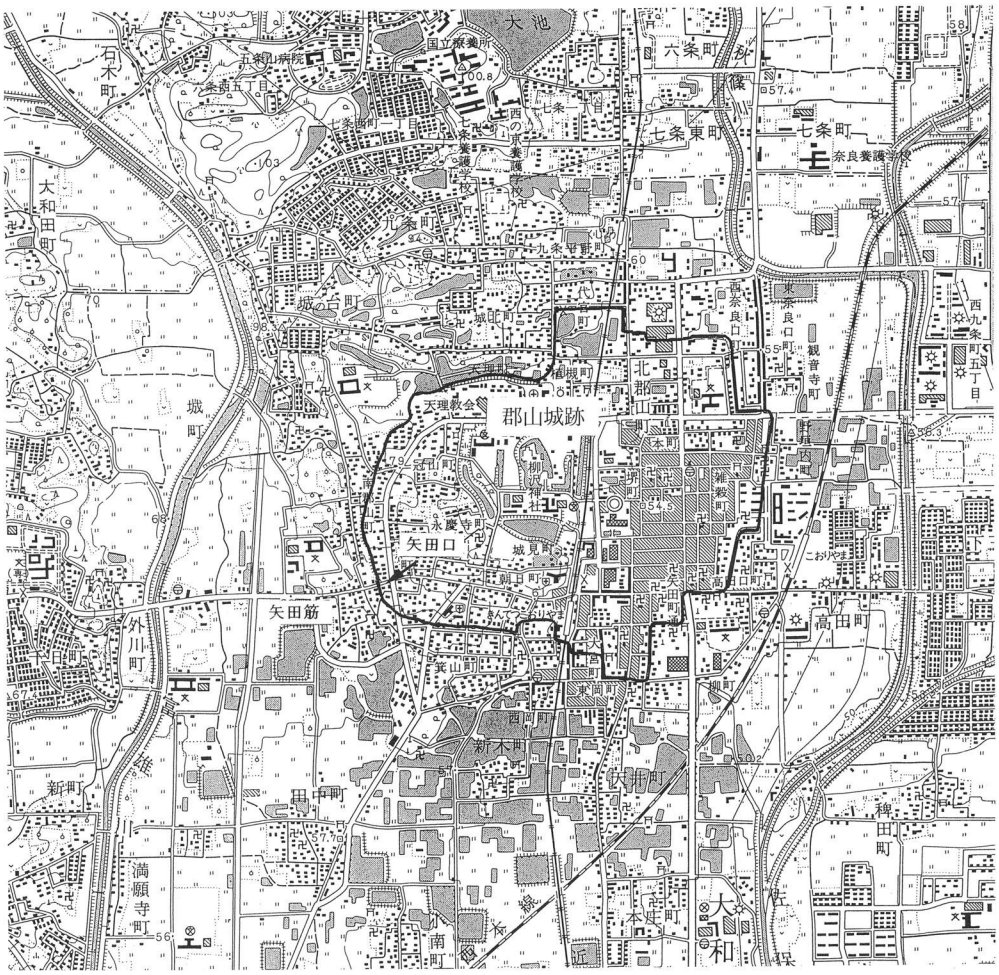

図12　「矢田口」の位置図（Ｓ＝1/25,000）

が知られている[4]。この矢田口～大職冠周辺は現在に至るまで焼き物に適した土（上部大阪層群の鉄分がやや少ない白色系粘土層。このほか近在の溜池や濠の底に溜まる泥土も原料となる）が産出するほか、周辺地形（西ノ京丘陵南端）が登窯の造営に適したものであろう。

なお、製作地に「矢田口」を記入する作品としてはこの鯱瓦のほか、最近になって鬼瓦が一点確認された。鬼瓦は市内北郡山町の旧郡山藩家臣豊田家の解体の際に発見されたもので、「天保六（1835年）未四月　矢田口瓦久」の銘文を有する。また、同所からは「矢田口兵助」銘のある鯱瓦（庭に置かれていた）も１点確認された。この個体は紀年銘を欠くものの、製作技法が今回報告のものとは大きく異なり、作風も幕末期の硬直した特徴をもつことから、幕末に世襲名「兵助」を名乗った別人の製作によるものと思われる。いずれにせよ近世中期末～同後期にかけて矢田口近辺に有力な瓦屋が数軒存在したことが想定される。ちなみに現在、矢田口近辺に瓦屋はない。

3　まとめ

本鯱瓦が柳沢文庫所蔵の鯱瓦と一対になることは今回確認されたが、この両者が郡山城内のどの建造物に使用されたものかについては、該当時期の城内補修の文書記録を欠くことから、残念ながら今回の調査では明らかにすることができなかった。しかし、「秀長百万石まつり」を契機として、一般市民の庭に眠っていた貴重な鯱瓦を歴史的資料として再生することができ、またその調査を通じて近世大和瓦職人の優れた技術の一端を知ることができたことは大きな収穫であった。さらに管見の及ぶ限りでは、考古学的手法によってこの種の特殊な瓦（発掘破片資料は除く）を図化・報告したものはなく、その意味においても今回の調査に少なからぬ意義を認める。今回の調査が以後の近世考古学的手法に則った該種資料の調査・報告の先鞭となれば幸いである。

なお、本書が公刊される頃、今回報告の鯱瓦はすでに所有者に返還されているだろうが、たとえ約１カ月という短い期間にせよ、廃藩置県に伴う櫓の競売（明治６年［1873］）によって離ればなれになっていた「夫婦」を約130年ぶりに対面させることができたということは、今回の調査を通じてのよい思い出となった。今後も機会があれば、この鯱夫婦を共に展示する場を持ちたいと思う。

注

1）大和郡山市秀長百万石まつり実行委員会編『展示品図録　秀長と郡山ゆかりのひとびと』（同委員会発行　1996）。
2）大和郡山市秀長百万石まつり実行委員会編『秀長くんと過ごした日々「秀長百万石まつり」－その準備から会期100日間の記録－』（同委員会発行　1996）。
3）南村俊一『石造物郡山城趾転用材調査概要』（〔財〕柳沢文庫保存会　1975）。
4）高橋隆博「近世赤膚焼の成立」（『赤膚焼』〔財〕大和文化財保存会　1991）。

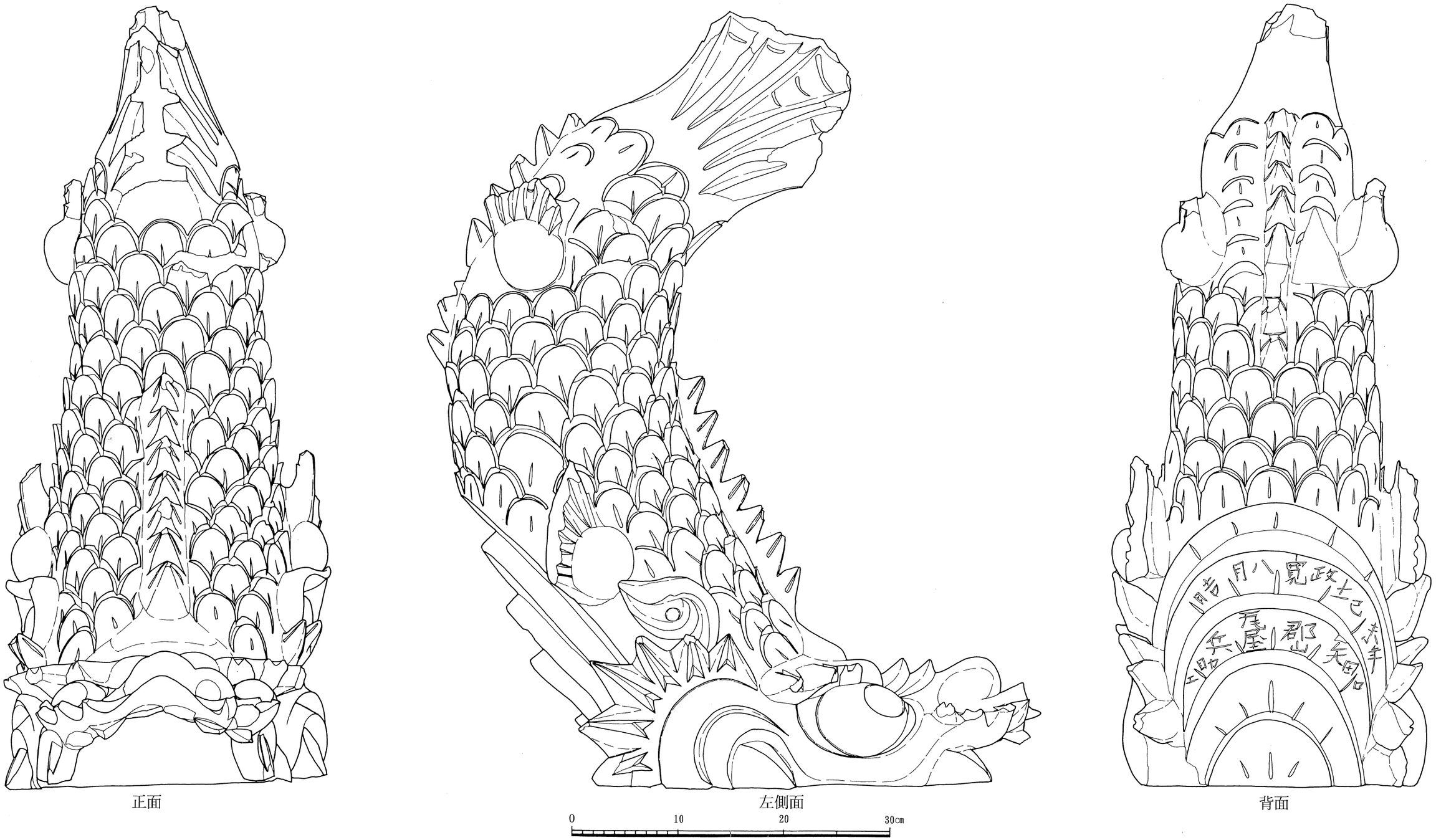

図 13　鯱瓦全体実測図（S＝1/4）

大和郡山市文化財調査概要　37

寛政十一年瓦屋兵助作銘鯱瓦調査報告

平成 9 年 5 月 31 日

編集・発行　大和郡山市教育委員会
大和郡山市南郡山町５５４－１

印　　刷　明新印刷株式会社